

幼児にお話しするときの心がまえ

石 森 延 男



幼児にお話しすることは、楽しいことにちがいありませんが、また、たいへんむずかしいようにも思われます。

いくらか年をとった子ども、小学一年生、二年生にもなれば、多少おもしろくなくてもじっとして聞こうとする気持もあります。幼児には、そんな努力は、まずありません。

おもしろくなければ、たちまちそっぽ向いてしまいます。えんりょもしなければ、がまんもしません。よそ向きをするだけではなしに、さっさとどこかへ行ってしまいます。

だいいち幼児は、注意力が長つづきしないからです。気をつけて、お話し心に向けている時間は、まことに短いものです。その短い時間を、たいせつに、うまく考えてお話ししないと、せっかくなお話しもむだになってしまいます。

このほか幼児たちの聞き方、聞く力をよく知っておくこと

が、どんなにだいじか、いまさらいうまでもないと思います。

ここでは、そのような幼児に向かってお話しするときの心理学的な疲労度とか、緊張持続時間などに対する心がまえをいいます。そうではなく、お話しそのものの中味とか、口でお話するときの注意めいたものをいくつか述べることにします。

はじめに、どんなお話を喜ぶかということについて。

(1) 耳に快いひびきをもったもの

こういっても、ぼんやりしていて、わからないかもしれませんが、次のようなことなのです。もの音など、それらしく歌うように話してやります。風の音、雨の降る音からはじまって、電車の走るひびき、波の音など、つまり擬音語のたぐいをお話の中にとりいれる。

すると幼児は、ことばだけよりも、ずっと生き生きとそのものの情景を思いおこすことができるからです。

あるいは、鳥やけもの鳴き声をまねて聞かせてやる。つまり擬声語のたぐいである幼児は、生きものがすきだから、いっそう喜ぶ。

(2) くりかえしのあるもの

同じ擬声語にしても、擬音語にしても、ただ一回だけ使うよりは、適当なところで、二ど、または三ど使うと、幼児は、そのひびきになれ、親しさをおぼえる。また、いいはしないかなと期待さえもつ。

ことばのよき繰り返しは、あるリズム感を生み出すことになり、音楽的な快さもわきたたせる。

(3) 歌をおりこむ工夫をする

お話の中に、メロディーのやさしい音楽、歌をうたってやることは、どれほど幼児を喜ばせるかわからない。対話を歌にしてもいいではないか、あるいは喜びを歌であらわしてもいいではないか。むずかしいことをいわないで、かっくに作曲して、楽しみつうたうことである。

(4) できるだけやさしいことばで

幼児のもっている語いの数は、いたって少ないから、その少ないことばの範囲内で、お話をするのが肝要である。でない

と、いくらお話をして聞かせても、わかってももらえないからである。

むずかしいことばを使っておとなたちに語るのはむしろやさしいが、幼児に理解させるように語ることは、難中の難である。

やさしいことばとはなんであろう。とりもなおさず幼児の生活の中に根をおろして生きていることばである。だから幼児に話をして聞かせようと思うならば、まず幼児語の調査、研究からはじめなければならぬといっても過言ではない。そうしてふだんから幼児語の蒐集、分類、応用などに関心をもつべきであらう。

(5) おもしろいお話であること

よくおもしろいお話というが、この「おもしろい」が、なかなかの問題である。わたしは、次の六つほどの要素を考えている。

(a) ロマン性に富むもの

じぶんの思いが、たちどころにかなうような世界である。

こうあってほしいと願えば、それがあつというまに実現するといったおもしろさがお話にはほしい。幼児は、まことに自由奔放な空想を描く、どうていおとななどのおよぶものではない。そんな時代に、よりゆたかなロマンを心象させることは、教育的にいてもねらいのあるものである。多くの名高

い童話が、いかにこのロマン性にかがやいているかを見てもうなづかれるであろう。

(b) 冒険性のあるもの

思いきって自分の力をためしてみろといった、こわさを抱きながらもやりとおすという強さにあこがれる。幼児にはまだそれほどはげしい冒険性はないにしても、だれもやっていないようなことを平気でやろうとする興味はもっている。そんな気持を満足させるようなお話は喜ばれるにちがいない。

(c) 悲劇性のまつわるもの

あまり悲しみの深いお話は、幼児の心をいためるから避けねばならない。けれどもいくらか、あわれみをかけられるような主人公の登場するお話は、幼児とても感動は深い。ただのお涙頂戴ふうのものではなく、なにかのために、つい悲運におちいったような主人公を見せることは、けっして避けるべきではないと思う。「シンデレラ」のごとき、「マッチ売りの少女」のごとき、いずれもある悲劇性をおびたものでありながら、けっこう幼児のものとして用いられている。

(d) 喜劇性をふくんだもの

お話の途中は、いくらか悲しいものでもでこよう。暗いできごとにもであるが、終りは、「めでたし、めでたし」でありたい。つまり喜劇ふうにまとめたものが好ましい。でない

と、幼児はおちつかないし、不安にかられるからである。「ああ、よかった」と安心させたいし、満足させたい。ただしむりなしめくくりをして、お話を不自然な形で終わらせることはおもしろくない。

(e) 変化のあるもの

お話のすじに、変化がなければおもしろさはともなわれない。単調のものであれば、幼児はたちまちあきてしまうからである。といってあまり変化がはげしくて、前後の関係がこみいって、重複するようになっては、わかりにくくなるから、考えねばならない。

伏線があり、漸層的に高まってきてお話の山にとどく。そこから一気に終末にいたるとい形式が、いちばん安定したものだらう。

以上五つばかり、いわゆるおもしろいお話というものの要素をひろいあげてみたが、このうち、一つでも備わっていれば、まずおもしろい話になる。

そうしてそのお話の中に、前に述べたような快いことば、ひびき、繰り返し、リズムといったことを心がけてもらえば、幼児は、目をかがやかして聞きほれること疑いなしだ。

おしまいにだれしも知っていることであるが、つい忘れがちな心がまえを念のためつけ加えておこう。

それは、仕草と表情のことである。

たとえお話が、単純素朴で、一見おもしろそうでもなくとも、いったんそれが話手のうまさにかかると、見ちがえるほどおもしろく、曲のあるものに変貌してしまうものである。

それは、話手の表情と仕草とによる。表情と仕草とは、お話の登場人物を目の前に浮き出していられるからである。お話を動的にするばかりではない、立体ふうに行行まで、ひろげるからである。

おとなは、そうでもないが、幼児は、お話のふんいきをたいへん好むのである。むしろそのふんいきに酔いたいのである。だから同じ話を二度も三度も聞いてなおかつあきない。あきないどころかささらにそれを求める。酔いたいのである。でなければ、すでに熟知している筋や人物などを、そんなにうるさいほど求めるわけではない。

ただ、表情も仕草も、過ぎたるはおもしろくはない。お話のふんいきを荒っぽくするのみならず、品を落としてしまうからである。このころのかねあいが、幼児にお話をしてやるべきことというものと思われる。

そのむかし、わたしは久留島武彦さんや岸辺福雄さんのお話にたいへん打たれたものである。それはお話の中味よりも、そのお話を生かすように口演する仕方に魅せられたものである。

わたしのようなおとなたちも、喜んで聞き入り、笑い、悲しみ、同情し、怒って、引き入れてくれるばかりではなく、園児たちは、それ以上にうつつをぬかしているのだから驚嘆せざるを得ない。

話術などはどうでもいいという人がいる。しかし幼児の場合に限っては、これはあてはまらない。けいこを重ねて話術をわがものにしたときに、思わざる功德を感じるにちがいない。

幼児教育講習会

主催 日本幼稚園協会

お茶の水女子大学附属幼稚園内

日時 昭和四十三年七月二十二日（月）より

七月二十五日（木）まで

会場 お茶の水女子大学講堂

●詳しいことは、次号でお知らせいたします。